

---

# いばら姫の城

紫雪 海

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いばら姫の城

### 【Nコード】

N5826Z

### 【作者名】

紫雪 海

### 【あらすじ】

ある日眠りから目を覚ますことがなくなる。少女だけにかかるそんな不思議な病。幼なじみの少女を目覚めさせるために動く少年の行く先にあるものは。

## グリム童話：いばら姫

昔々のお話です。

ある王国に仲の良い王さまとお妃がいました。二人の間には子どもがなく、たいそう子どもを欲しがっていました。毎日子どもが欲しいと思いつながら暮らしていましたが、いつまで経っても子どもはできません。

そんなある日、蛙が一匹お妃さまの前に現れて、こう言いました。「お妃さまのお望みは叶うでしょう。もうすぐ、お姫様がお生まれになるでしょう」

それから間もなく、蛙の言葉通り、お妃さまはとても美しい女の子を産みました。

姫の誕生をひどく喜んだ王さまは、盛大な祝いの宴会を開くことにしました。王さまは祝いの席に、国中の魔女たちを招待しました。

王様の国にいる魔女は十三人ですが、金の皿は十二枚しかありませんので、誰か一人、どうしても呼ぶことが出来ませんでした。

祝いの宴会は盛大に進み、招待した魔女たちは、めいめい、お姫様に美しさや優しい心など様々な素晴らしい贈り物をしました。

そして、十一人目までが贈り物を終えた、その時です。祝いの宴会に招待されなかった十三人目の魔女が姿を現し、王様に向かって言いました。

「よくも私だけのけ者にしてくれたね。お姫さまに素敵なお祝いを持ってきたよ。十五歳まで、お姫さまは皆に愛されて美しく育つだろう。だが、十五歳の誕生日、錘つむに刺されて死ぬことだろう」

それだけ言うと、魔女は姿を消しました。

皆が先程の魔女の言葉に恐れおののいているところへ、十二人目

の魔女が言いました。

「私はまだ贈り物をしておりません。私にはこの呪いを取り去ることは出来ませんが、お姫さまの死を避けることはできます。お姫さまは十五歳の誕生日に錘に刺されるでしょう。しかし、死ぬのではありません、百年の間、死んだように眠りつづけるだけです」

王さまは、お姫さまを十三人目の魔女の呪いから守ろうと、国中の錘という錘を全て焼いてしまうように、と命令を出しました。

お姫さまは、十一人の魔女の与えてくれた贈り物のおかげで、器量がよく、優しく美しい、見るもの会うもの全てが可愛がり愛さずにはいられない者に育っていました。

お姫さまの十五歳の誕生日のことです。その日は、王さまもお妃さまも留守でお姫さまは城に一人でいることになりました。

お姫さまは城中を歩き回りました。そして、最後に古く高い塔に上りました。

螺旋階段を上った、その塔の一番上では、一人のおばあさんが、十五年前に全て焼かれたはずの錘を手し、麻を紡いでいました。

「おばあさん、こんにちは。何をしているの？」

「こんにちは、お姫さま。私は今糸を紡いでおります」

おばあさんが言いました。生まれてこの方錘を見たことのなかったお姫さまは、錘に触れてみたいと思いました。

「おばあさん、私にも糸を紡がせて！」

お姫さまは糸を紡ごうとしました。

「痛い！」

と、お姫さまの指に錘が深く、刺さりました。途端に、お姫さまはぱたりと倒れてしまい、それきり深い深い眠りについてしまいました。

お姫さまが眠りについて、王さまやお妃さまはもちろん、城中の者達が悲しみました。

そこに、お姫さまに眠りの魔法をかけた魔女がやってきました。

魔女は、お姫さまが目覚めるまで城中の者を眠りにつかせる魔法をかけました。そして、城の全てを、荊<sup>いはら</sup>で覆い尽くしました。

美しいお姫さまと城の話は、各地に広まりました。

何人もの若者がお姫さまを目覚めさせようと荊に囲われた城に乗り込みましたが、悪い魔女が邪魔をして、誰もお姫さまの所までたどり着くことはできませんでした。

ある王子さまが、その話を聞いて荊の城にやってきました。

王子さまは悪い魔女を倒し、ついに眠るお姫さまの所までたどり着きました。

そこに、お姫さまに眠りの魔法をかけた魔女が現れて王子さまに言いました。

「呪いを解くには、お姫さまに口づけをしてください」

王子さまは魔女の言うとおりに、お姫さまに口づけをしました。

とたんに、お姫さまがぱちりと目を開け、それと同時に城を覆っていた荊が消え、城中の者が目を覚まし動き始めました。

目覚めたお姫さまと側にいる王子さまを見た王さまとお妃さま大喜びしました。

それから、お姫さまと王子さまは盛大な結婚式を挙げて、二人は幸せに暮らしました。

## グリム童話：いばら姫（後書き）

いばら姫、あんまりよく覚えてないけど大体こんな感じの話だった  
と思います……。

## いばら姫の眠り - 1

ある夜、少女の夢に黒い服を着た人が現れました。

「あなたは、だあれ？」

少女は尋ねました。

「私は魔法使いさ」

黒い服を着た人は言いました。不思議そうに首を傾げる少女に、魔法使いは続けました。

「私はあなたに眠りを持ってきた」

「眠り？ でもこれは夢でしょう？　すでに眠りにについているわ」

少女の答えに、魔法使いは首を横に振りました。

「違うよ。これは確かに夢だが、そうではない。あなたには長い長い眠りについてもらう。それは、決して目覚めることのない眠りだ」

「目覚めない眠り？　それは、死ぬということ？」

魔法使いの言葉に死を連想したものの、少女の心はなぜか乱れることもなく魔法使いに問い掛けました。

「いいや、違うよ。言っただろう、あなたは眠りにつくだけだ、死ぬわけではない」

「じゃあ、何？」

「あなたはこれから決して目覚めることのない眠りにつく。これは魔法だ。ただ唯一、あなたが心から求めるものが、あなたへの愛を誓えば魔法は解けあなたは目覚めることができる」

「なんだかおとぎ話のようね」

「そうだよ、これはおとぎ話だ」

少女の呟きに、魔法使いは答えました。そして、続けました。

「さあさ、お眠り可愛いいばら姫。あなたの愛しいものが来るまで夢であるはずの空間で、少女の意識はだんだんと真つ暗な中へと沈んで行きます。もっともっと、深い眠りの中へと、少女の意識は落ちて行きました。」

翌日、少女が目覚めることはありませんでした。慌てた家族がどんなに揺すつても、呼び掛けても、目を覚ますことはありません。それから何日経つても、少女が目を覚ますことはありません。



## いばら姫の眠り - 2

男性にしては少し長めの髪を靡かせながら、紺色の学ランに身を包んだ黒い瞳の少年、栗村佑は耳にイヤホンを入れてお気に入りの曲を聴きながら歩いていった。

今は平日の朝だから、もちろん学校へと向かうためだ。

背後から軽快な足音を響かせ彼に近づいて来る者がいるが、その音は自身の聴く音楽のため佑の耳には届いていない。

ふいに、背中に広がる衝撃。転びそうになるのを足を踏ん張ってこらえた。

佑が自分の後ろに睨むように目を向けると、一人の少女が立っていた。

漆黒の瞳に、その瞳の色と同じ色の艶やかな髪を腰ほどまでに垂らし、美しいその顔には、満開の向日葵の花ように明るい笑顔を浮かべていた。

少女は佑が耳はめているイヤホンを引き抜いて言った。

「おはよう、佑。今日もいい天気ね」

「……深夜、いい加減にしろ」

転びそうになったことを非難するように、佑は言った。

「挨拶くらい返しなさいよ」

だが、深夜と呼ばれた少女は佑の言葉を流して言った。

深夜　春宮深夜は佑の幼なじみで日本でも大きな会社である春宮グループの社長の一人娘、所謂社長令嬢のお嬢様だ。

黙って座っていれば、それこそ顔立ちはひどく整っているのだから、等身大の日本人形にもみえる。だが、一度口を開けばその口から皮肉や罵詈雑言といった言葉をすらすらと出す。もちろん相手が自身に悪口や嫌味を言わないかぎり深夜がそれを返すことはない。

「おはよう」

佑はしばらく無言で見ていたが、諦めたようにため息を付くと言

った。深夜はそれに満足そうにっこりと笑った。

「イヤホンで音楽を聴くと周りの人と話さなくなってコミュニケーション能力落ちそうだから止めなさいって言ったでしょ。没収」

深夜は佑の胸ポケットに入っている音楽プレイヤーからイヤホンだけ抜くと、纏めて自分の制服のスカートのポケットの中へと入れた。

「おいっ！」

「今まで何度言っても聞かなかったからよ」

佑は取り返そうかとも思ったが、仮にも相手は一応女性であるため、佑は考えて止めた。そもそも佑が音楽を聞きながら登校し始めたのは高校一年の頃からののだが、一年の三学期の中頃から急に深夜が今のような行動をとるようになった。最初こそしつこいと思っただが、今ではもう慣れたものだ。

イヤホンを取られたのは初めてだが、百円均一でも買えばいいや、と佑はイヤホンを取り返すことを諦めた。

「耳が寂しい佑のために、私が話し相手になってあげる」

そう言って、深夜は佑の手を取って自分の指を絡めて引いた。ここ最近、深夜の佑に対するものとして増えた行動である。もう高校生にもなつて異性と手を繋ぐなんて、と恥ずかしく思わないこともないが、生まれたときからずっと一緒だった幼なじみの深夜であれば、佑が特に異性として意識することもなかった。逆に甘えん坊のような妹に思えて一人っ子の佑は少し嬉しかった。

隣を歩く深夜の機嫌の良さそうな様子を見て、佑は深夜も自分と似たような気持ちなのだろうな、と思い小さく微笑んだ。

耳に心地よく響く深夜の声。色々思うこともあるが、指は深夜との会話を楽しんでいた。

深夜は口に多少問題はあるものの、明るく優しいので男女問わず誰からも好かれる。もちろん、佑にだって沢山の友人がいるが、高校生ともなると同性である男友達が多い。そのため、男友達間だけでは出ないような話や小さな流行、近所のおばさん達がするような

世間話までも出てくるので、たまに同じ話もあるが、大体いつも様々な話をしてくれるので、新鮮味があり楽しい。

「ねえ、佑。またねむり病の患者が出たんだって」

佑はその言葉に、深夜の方へと目を向けた。

ある日いきなり眠ったまま目を覚まさなくなる病。一年ほど前から起こりだしたもので、誰が呼んだか、症状をそのまま指した通称は『ねむり病』と呼ばれている病気。

この病にかかるのは十二歳から十八歳の少女のみだという特徴がある。

原因が不明で治療法も見つかっておらず、少女達はずっと眠ったままだ。

「今度は私たちと同じ年の十七歳の子だって」

静かにそう言う深夜の姿を、佑は不安そうに見つめていた。

初めて、深夜が佑にこの話を振ったとき、深夜はポツリと呟いた。

「まるで、童話の中のお姫様みたい。いいなあ」

まるで、羨ましがするような深夜の言葉とその時の深夜の表情を、

佑は忘れることができない。

## いばら姫の眠り - 2 (後書き)

だんだんとこれから話が展開していく予定です。  
長くなると思いますが、まったりゆったり、おつきあい頂けると  
嬉しいです。

### いばら姫の眠り 3

まるで夢見るような、どこを見ているのか分からない表情に、どろりとした闇を湛えた、光の差さない意志を持たないその瞳に、空気に消える空っぽ言葉。

その時、佑は深夜の存在がそのまま消えてしまうような気がして絡められている深夜の手をぎゅっ、と強く握った。途端、深夜はその白い肌を少し赤に染めた顔に不思議そうな表情を佑に向けて、どうしたの？ と佑に聞いた。

佑はなんでもない、とその時は首を振った。それから、いつも通り深夜が佑の手を引いて二人は学校へと向かった。

それが、約一年前のこと。

それ以来、深夜はこの話題を佑に振るとき、いつもその時と同じ表情をしていた。佑は最初のあの時以来、深夜の手を強く握ったことはなかった。しばらく歩いて学校に着く頃にはいつも通りの彼女に戻っているからだ。

見ると、まだ不安には思ってはしまいが、もう見慣れてしまった幼なじみの様子。

と、今日は深夜の手の力が強まった気がした。

ふと、深夜が顔を上げて佑を見た。真っ暗なその瞳と目が合い、佑はたじろいだが何故か目を逸らすことができなかった。

「ねえ、佑」

深夜は佑から目を逸らすことなく言った。

「魔法を解くのは、何だと思う？」

「さ、さあ。何なんだ？」

深夜はにこりと笑った。それは、とても綺麗な笑み。しかし、いつものような明るさを感じない、どこか空虚な笑み。深夜は言った。「愛よ。魔法を欠けられた者には、その者が望む者の愛を。そうすれば、魔法は解けて、目を覚ます。私はこれは病気ではなく魔法だ

と思うの」

佑はただ、それを聞いていた。

「ねえ、佑。どの童話でも、王子様と出会えるお姫様は、一人だけなのよ」

佑は、あのときのように、深夜の手を強く握った。手を離してはいけない、と何かが佑に強く訴えているような気がした。

と、急に強く握られたことを不思議に思ったのか、深夜はきょとんとした顔で繋がれている手を見た。

「どうしたの？」

先程のような空虚なものではなくいつもの生き生きとした瞳を、深夜な佑に向けた。

「……何でもない。それより、早く行くぞ。電車に乗り遅れる」

一年前と同じようなやり取りを交わす。

急に動き出したことによる崩れたバランスを立て直していくくる深夜を後ろにして、佑は握った手の力を緩めぬまま駅へと足を進めた。

## いばら姫の眠り - 4

学校が終わり、佑は下駄箱で深夜を待っていた。

帰りのホームルームが終わり、部活動に入っていない、いわゆる帰宅部である佑が同じく帰宅部である深夜といつものように帰ろうとしたときだった。深夜は隣のクラスの男子に呼び出されて教室を出て行った。

告白というものであると考え、申し訳なさそうな瞳で、しかし面倒臭さそうな表情をしている深夜を佑が見送ったのが三十分前。図書室で本を読んでいると深夜から用事が終わったことを告げるメールが三分ほど前に来て、佑は読んでいた本を閉じて片付けると、荷物を持って下駄箱に向かった。

教室での別れ際、「待つてる」などとは言っていないし、「待つてね」などとも言われていないが、特に急用が無い限りは待つている。佑と深夜のいつもの応酬だ。

告白で深夜が体格のいい男子生徒に呼び出されたときは、かつては色々心配したこともあるが、彼女に不貞を働こうとした輩は全員彼女が得意とする合気道によって倒されていることを知り、佑は深夜の身を案じる必要はないと結論付け、心配することを止めた。

「ほんと、あいつはどこの男よりも絶対男らしいしよな」

「あいつって誰？」

小さな声で呟いたはずの独り言に背後から返事が返され、佑は驚いてびくりつと肩を震わせた。

飽きるほど聞き慣れた声に振り返ると、不機嫌そうな顔をした深夜がそこに立っていた。

制服こそ汚れてはいないが、長い髪が明らかに風が原因とは思えない乱れ方をしている。息は整っている。

「さあ？ 誰だっけな」

頭2つ文低い位置から見上げてくる深夜の黒い瞳から必死に目を

逸らしながら佑は答えた。まるで、目を合わせると襲いかかられると恐れているかのように。

と、深夜の両手に佑は顔を力強く引き寄せられた。深夜と佑の、少し色素の違う黒い瞳がかち合う。

「私が秀でて強いんじゃない。相手が私よりも弱いだけよ」

少女の勝ち気な瞳が笑う。

ぱっと顔が放されて、佑は少しバランスを崩す。深夜に向かって倒れてしまわぬよう体位を立て直しながら、佑はやはり深夜は男らしいなと思ったが、今度はもう声には出さなかった。

「帰ろっ！ お腹空いた」

深夜が佑に急かすように言った。

「食いしん坊」

佑は苦笑しながら返した。

そうして二人は、帰路に着いた。

「ふぁ……」

口を手で隠しながら、深夜は大きくあくびをした。

「寝不足か？」

佑はそんな深夜の様子に珍しい物を見るかのように言った。

朝の電車内。通学ラッシュ時ではあるが通勤ラッシュ時ではないため、車内にはスーツ姿の人よりも学生服姿の人の方が多く見られる。人もそこまで多くない。

深夜は寝起きがいい方であり、佑は彼女が起きている内であくびをしている姿などは今回が初めて見る、というほど深夜が人前であくびをすることはない。

「うっん。いつも通り九時間は睡眠ちゃんと取ったんだけどな」

またあくびをしながら深夜が答える。

「相変わらずよく寝るな。先週の文化祭の疲れが出たのかもな。ク



ラス委員にプラス文化祭実行委員。お前もよく頑張ったよな」

「あー、まあ、疲れたと言えば疲れたかな。土日ですっきり取れたと思っただけ、そうなのかな」

佑の言葉に考えるように深夜は答えた。

そんな深夜の様子を見ながら、不意に、佑は昨日の朝の深夜の様子を思い出し、言いしれぬ不安を胸の内に感じた。

『ねむり病』

深夜がそのまま眠ってしまい、目覚めなくなってしまうのではないかと、佑はそう思ってしまった。佑はねむり病にかかる状態やその詳しい病状については何も知らない。

「深夜」

「何？」

佑が名を呼ぶと、深夜が佑へと顔を向けた。

「眠るなよ」

「居眠りするほど眠くはないわ」

深夜の軽い答えに、佑は自分の不安を深夜に伝えようとしたが、伝えたらからかわれると思うと同時に、そんなことあるはずないかと今まで自分の考えていたことが一気に馬鹿らしく思えてきて、伝えることを止めた。

「授業中に居眠りしても、起こしてはやんねーからな」

そう言うと、深夜は居眠りなんてしないわ、とふわりと笑った。

その日学校では、たまにあくびは出すものの深夜は居眠り一つせず一日何の問題もなく過ごしていた。

## いばら姫の眠り - 4 (後書き)

あと一回くらいで第一章終わる予定です……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5826z/>

---

いばら姫の城

2011年12月21日21時48分発行